

ミニッツ(あるいはオーバーナイト)ペーパーへの回答 (2016年1月28日)

「今はインターネットが普及しているので[...]言語間での語彙の交換が日常的に見られます。II型の言語間でもお互いが所有しない知識を取り入れるために、translatio studiiのような営みが行われているのではないかと考えさせられました」

それはもう仰る通りで、情報のやり取り、純然たる語彙の水準での交換は、「未熟」な言語から「成熟」した言語へとという方向においてさえ日々起こりうるし、現に起こっているものです。本授業ではそうした情報伝達とは異なる(と私には思われる)水準の事柄を扱いました。

「フランスでは翻訳が創作と同じ位置にあったというのは意外でした」

フランスに限らず、かつて(世俗的)書き物がジャンル分けに関して今よりずっと自由で放埒な時代(authorshipの確立していない時代)がありました。細分化される前の状況に対する想像力がいっそう育まれますように！

「今回、先生の説明にあったI型・II型に分けることは非常に大事であり、また、私の疑問を解決する手掛かりになった。／[...]。最初の翻訳はI型であったが、その後も、I型のままとして条文に存在し、柳父章先生のいう「カセット効果」は、時と場合によって、権力者はその効果をうまく利用した一種のまやかしかもしれない」

御研究にいくらかでも役立ったとすればそれほど慶ばしいことはありません。とはいうものの、講義の中で再三強調したように、言語の成熟度(ないし形成の度合)による分類は、やはり仮初のものであり、仮構物、要はフィクションであるという点を忘れぬようにしてください。フィクションでない理論的言説など存在しないわけですが、ある特定の観点から物事に光を当てる、そのことで見えてくるものがあればその仮構はいくらかでも意義をもつはずですが、同時に、まさしくその光のせいで却って見え難くなってしまうものもおそらくあるだろうということです。

私が提示した成熟度はあくまで言語についてのものであって、社会の、また文化のそれとは異なります。結局は同じところに帰着するのだとしても、両者をつなげるには別の議論が必要となるでしょう。

柳父さんの「カセット効果」は、翻訳に限定されぬ、あらゆる言葉にそなわる物<sup>フェティシズム</sup>神的側面の謂いではないでしょうか(人は何故さしたる意味もなく流行り言葉を口にしたがるのか、言葉に殉ずる人がいるのはどうしてか)。そして、権力者が言葉のフェティシズムを利用するというのは大いにありえる話です。日本でも昨年、政府のさる関連機関が全女性に対してshine!と、何故か英語で呼びかけていましたね(しかしこれは本当に英語なのだろうか……)。

「修辞学と翻訳学の通路も発現するような感じがした。なるほど、西洋の思想、文学など諸学問を研究する始めに、アリストテレスの『詩学』に遡るべきだ」

翻訳が言葉の営みである点を忘れ、情報伝達と同一視する傾向が翻訳研究(translation studies)には少なからず存在しているように私には思われます。その意味で、『詩学』を始め、言語についての思索を改めて読み直すことはきわめて大切と考えます。

「知、知識には言語化されやすいものとそうでないものがあると思うし、[...]知識の種類によって、すんなりと移し替えられるものとそうでないものがあると思う。／成熟言語、未熟言語というくり方をすると当然、成熟→未熟への移動が多くなり、言語間に優劣が生まれるのではないか」

知(知識)と情報が混同されているように見受けられます(つまり *translatio studii* と情報伝達は違うということです)。「言語化されにくい」知識。音楽や絵画、映像によってしか表現できない知があるとは私も思いますけれど、そのような知を説明するためにはしかし結局のところ言語に拠るほかないという恐るべき事実は認識されているでしょうか。それに、本授業が翻訳を対象としている以上、言語化される知識(だけ)が問われているのは明らかで、授業の感想としてはだから反則ですね。どうせ反則技を繰り出すのであれば、映像なり音楽なりから言語への「翻訳」という知の移転について論を展開するなどして欲しかったです。

成熟した(形成がひととおり終わった)言語間の翻訳に基づいている現在の翻訳(理)論を相対化すべく提示された仮構なのでから、「言語間の優劣」うんぬんという話とは全く違います。翻訳研究は、そんなことを危惧するよりも、翻訳(や隠喩)に本質的にそなわっているところの、〈名を奪う暴力〉、〈名を別の名に置き換える暴力〉への感受性を磨かなくてはなりません。

「古代では、翻訳という行為に、とても政治的な意図を感じました。現代の翻訳的には、本来そういう意図が含まれてはいけない、という考えがあるように思いますが、その倫理観はとても危ういものなのだな、と改めて思いました」

かつてあったように思われるそうした政治性とは別の文脈で、現代においても政治的な翻訳は行なわれています、というか近年、性的・人種的等々の少数派による「アイデンティティ・ポリティクス」の一端を翻訳は担うようになっています。翻訳がなぜ「不実な美女」であったり「誠実な醜女」であったりしたかといえばそれは、端的に言語が女(要は女性名詞)だからで、たとえば十九世紀フランスでは、女であるところの言語に、男であるところの詩人が働きかけて何かを産ませるといった構図が当り前のように受け入れられていました。こうした事例にはもううんざりという人にとって、原典に対する敬意などより、政治的翻訳の実践を通じて翻訳の「倫理」なるものの正体を暴くこと、そして真の倫理を見出すことの方がより重要なのです。

「それとは別に、例えば *diversity* という言葉が生物や生態系など、事実に基づく共通認識であれば「多様性」という日本語でしっくりくるのに対し、人種・民族・ジェンダーなどの話になると、「多様性」ではどこか焦点がぼやけてしまうと感じるのか、そのままカタカナで「ダイバーシティ」と言われる(書かれる)ことがあります。その場合、社会問題の認識のしかたにおいて、日本はまだ成熟していないためにこういうことが起こるのではないかと思いました」

カタカナでダイバーシティという私などは、昨年世間を騒がせた東京オリンピック・エンブレム問題を思い出します。件のデザイナーは「ダイバーシティ」の象徴として黒を提示していました。説明文を何度読んでみてもその理路は判然としませんでした。それはともかく、「人種」や「民族」など、本質的定義が不可能な事柄について「ダイバーシティ」が用いられるとすれば、そうした傾向は詳細な分析を試みる価値があるかもしれません。

もっとも、この授業で問題となったのはあくまで言語の形成の度合であって、社会の成熟度そのものではないこと、また言語の形成がとりあえず済んだ社会であっても、特定の分野において語彙や概念を自前で用意できないことは当然ありうると、再度強調しておきたいと思います。

「思えば、個人の翻訳技能の進展においても、高校で和訳をやらされている段階では「それしかない」[形式的な移し替えを行なうしかない]わけで、翻訳に熟達した後に、[……。]。／オレームや諭吉が造語をしたように、受容側の言語に対応する言葉(あるいは概念)が成立していること、というのは間違いなく一つの成熟の因子でしょうし、例のブルーニの tradotto のように、概念として存在していても、それが言葉として広い文脈で使われるようになっていく、ということも一つの条件かもしれませぬ。また[……。]話者が「自国語」(自分たちの言葉)という意識を持っているかどうか、といった文化的側面も因子になりそうな気がします。／[……。]この点を追及すると、果たして「言語の成熟」という捉え方でいいのかということも問題になってくるのではないのでしょうか。[……。]。／いずれにせよ、差しあたり「言語の成熟」としたことがらについてのこうした精緻化・再定義を通じて I 型と II 型を統一的に理解し、その中で、こういう場合は I 型、こういう場合は II 型で、II 型においてもこの点は翻訳不可能、というような説明ができれば最高です。さらに考えてみたいと思います」

いわゆる学校英語の事例が引き合いに出されている点、問題意識が共有されていると感じました。中高生の中には、英文和訳の課題を通じ、生涯初めて、それなりに高度な内容の日本語を書くという人が少なからずいる。まさに翻訳を通じて言語が形成されようとしている、いわばひとつの翻訳的瞬間であって、その現場に立ち会うことのできる幸福な教員がいったいどれくらいいるのかわかりませぬけれど。もともと、個人の水準における事柄と社会の水準でのそれを、相同的だからという理由でつなげるのは難しいと思います。

理論的な<sup>フィクション</sup>仮構というのは、何かが見えるはずと期待しつつ特定の観点から物事を照らすことですが、そこでは当然その光によって翳される部分が生じてしまう。そこを拾い上げてくださっているということはすなわち、私の問いかけを正面から受け止めた——というよりむしろ、日頃から翻訳にかんして思索をめぐらしていることの表れにほかなりませぬ。仮構物というのは文字通り仮初のものに過ぎないわけで(私自身、多くの事柄を捨象しています)、上手く行かなければ躊躇なく修正すればよいのです。どうか着実に思索を展開してください。

一点だけ、いわずもがなのことを記します。翻訳というのは、言語と社会のかかわりのひとつの顕れですが、私は主として言語の側からの見方を提示しました。社会の側から物事を捉えようとするとき、間口を拓げすぎて anything goes の状態に陥ってしまうということが往々にして起こります。学問というのはある意味で線を引くことであって(学知の倫理)、とりあえず境界を、もちろん意義あるやり方で劃定しなくては学ではなくなってしまうということです。